パイユートのゆりかご

特別展「みんぱくキッズワールド」出展作品
ゆりかご（標本番号H 83428、高さ／25.7cm　幅／36.3cm　奥行／69.5cm）

池谷 和信（いけや かずのぶ）
民族社会研究部

くぅー　あ　くぅー　　小さなハトさん
くぅー　あ　くぅー
風が揺らしてる　松の枝のきみの巣を
ぼくの腕が揺らしてる　小さなハトさん
君の巣を
くぅー　あ　くぅー　　小さなハトさん
よーくお眠り　小さなハトさん
くぅー　うつぅー　　小さなハトさん

これは、アメリカ西部の内陸部に暮らすパイユートの子守歌で、「ゆりかごのうた」とよばれる。パイユートは、大盆地の砂漠地帯で狩猟や採集で生計をたて、移動生活を送ってきたインディアンである。彼らが馬を利用するようになったのは一六世紀にスペイン人がやってきてからである。一九世紀前半には、毛皮交易にきたヨーロッパ人から、ガラスビーズを入手した。一九世紀後半には数多くの軍隊駐屯地などがつくられ、急激な生活変化を経験した。

彼らのゆりかごは、ユニークである。赤ん坊の頭をおおうフードには、細い木で作ったカバーがつけられ、体を皮製のひもでしばるようになっている。しかも、カバーにジグザグに入った赤色の刺繍は女の子用のゆりかごを示し、それがないのが男の子用である。さらに、装飾にはみず色を基調とするビーズ細工がほどこされていて芸術的でもある。一九世紀のゆりかごには、白色を中心としたガラスビーズで板の面をうめつくしたものもあるが、現代ではプラスチック製のビーズを線状に並べて簡略化している。

かつてパイユートの社会に馬が導入されると、移動の方法は大きく変わった。馬の脇腹に二本の丸太がくくりつけられ、そこに荷物のほかに赤ん坊を入れたゆりかごをしばるのである。一九世紀の終わりに移動生活が終わると、子どもを運搬するゆりかごは使われなくなった。しかし、一九八〇年頃になると、かつてのパイユートの暮らしを復元するために、ゆりかごがつくられるようになった。